

あいさつにおける日中対照研究
—日本語教育の視点から—

総合文化学専攻 日本文化理解プログラム
段 韵怡

1. 研究背景と目的

グローバル化が進展した現代社会において、人の往来が増加している。ビジネス、就労、留学、国際結婚などの目的により、日本に滞在する外国人も増えている。この状況によって、異文化間コミュニケーションの場面が増加し、日本語学習者も増加している。

異なる社会においては、それぞれの対人意識、言語文化、社会規範等が必ずしも一致するわけではないため、コミュニケーションの摩擦が生じやすい。人と人がコミュニケーションをする場合、何等かの目的を持っている。その目的により、会話に入る前に使うあいさつにも違いがある。時間、場面や相手など多くの要素に応じて、言語行動を調整する必要がある。

本論では、あいさつを「人と会ったときや別れるとき、対人関係により、何等かの目的を持った、社交的・儀礼的な言語行動」と定義する。研究対象として、出会いのあいさつに注目し、意識調査を通じて、ポライトネスの観点から日本人と中国人は場面や対人関係ごとに、あいさつの使用とあいさつに関する意識の相違点を考察し、その原因を明らかにする。また、日本語教材におけるあいさつに関する項目を分析し、日常生活での場面や状況、人間関係などに応じてあいさつ行動を調整し、円滑に使用できる能力の習得に資する資料を提供する。

2. 論文の構成

本論の構成は以下の通りである。

第一章では、研究の背景と目的を述べた。学習者の増加とともに、異文化間の交流で摩擦が生じやすい。両言語間のミスコミュニケーションの要因を明らかにし、学習者に人間関係などに応じて円滑にあいさつ行動を使用できる能力の習得に資する資料を提供することは本論の目的とする。

第二章では先行研究を踏まえ、以下の課題を挙げた。

- ①親疎別による、偶然の出会い場面におけるあいさつの使用状況
- ②用件の有無・負担の有無と対人関係による、出会い場面のあいさつの使用状況
- ③出会いの場面におけるあいさつに関する意識

また、中国語教育のあいさつの分類を枠組みとして、日本語と中国語のあいさつ分類対象表を提示した。

第三章では、調査の分析結果を述べた。出会いの場面におけるあいさつ表現の選択に、親疎関係、上下関係がどのように影響するか、日本人と中国人との意識の相違を知るため、意識調査を実施し、ポライトネスの観点から分析を行った。調査対象は中国および日本の大学に在学している学部生・大学院生（留学生を除く）である。調査の分析は主に以下の点で行った。

- ①学内での偶然の出会い場面でのあいさつの日中の違い
- ②場面の性質による日中のあいさつの比較

③あいさつに関する意識調査

第四章では、研究結果を整理した。整理した結果は以下になる。

①日本人と中国人のあいさつ表現の選択については、全体的に親しい相手に対して、中国人は「関心・尋ね型」のあいさつを選択するが、日本人は「安否確認型」、「慰労型」を選択する。（ただし、今の日本人の「お疲れさま（です）」は、実際には相手をねぎらう意味合い（「慰労型」）はなく、形式的なあいさつ表現として使われているという指摘がある。）親しくない相手に対して、中国人はあいさつを避ける傾向があるが、日本人は「安否確認型」、「慰労型」を選択する傾向が見られる。

②負担の大きさによるポライトネスの変化に関しては、中国人と日本人は、全体的にポジティブ・ポライトネス・ストラテジー（PPS）、すなわち、相手に積極的に近づく機能を持つあいさつを使用する傾向があるが、中国人は負担無の場合、「上・疎」に対して、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー（NPS）、すなわち、相手のフェイスを重んじて積極的に近づく機能を持つあいさつを使用する人も半数近くいる。負担大・小は大体同じく、過半数の人はPPSを使用する。一方、日本人は「上・疎」に対して、NPSを使用する傾向がある。また、負担の増加に伴い、PPSを使用する人も増えている。日中を比較すると、中国人は負担の有無と関わらず、PPSを使用する傾向があるに対し、日本人は負担無・小の場合、ポライトネ・ストラテジーの使用傾向はほぼ同じだが、負担大の場合は、NPSを使用する人が増加する。

③あいさつの機能に対する意識として、日本人と中国人は以下のような違いが見られた。a. あいさつに相手の呼称をつけること、年中行事に適したあいさつをすることを中国人は重視する。b. 日本人は相手と近づくための表明（ポジティブ・ポライトネス PF への配慮）として、あいさつをし、中国人は相手に敵意がないことを表明する（ネガティブ・ポライトネス NF への配慮）ためにあいさつをする。ただし、遂行したあいさつから見ると、日本人は用件がある場合の負担の大小によってNPS、PPSの両方を使うが、中国人はいずれもPPSを使用する傾向が見られた。

第五章では、日本語教材にみられるあいさつの取り上げられ方を分析した。本論では、中国で使用される初級日本語教材2種類、合計四冊（『新版 日中交流 標準日本語 初級上・下』、『みんなの日本語 初級Ⅰ・Ⅱ第2版 本冊』）で取り上げられているあいさつ表現を抽出し、分析した。その結果、表現形を並べて紹介したもの、短い会話の中で使用されたものが多いが、場面、状況、対人関係などは十分に示されていないことが明らかになった。たとえば、本論の意識調査で示された、日中のあいさつ行動における親疎、上下関係や状況（依頼場面での相手の負担の違い）の違いについて、取り上げられていない。そのため、学習者には、中国人と日本人とで、あいさつ表現の選択の要因に違いがあることを学習しないことが予想される。あいさつの使用には、それぞれの社会において、文化や行動規範、対人関係などが関わっているということである。あいさつを体系的に整理し、様々な場面や状況に応じて、円滑的なあいさつを使用できる能力を求める必要がある。

また、今後はより複雑な人間関係、状況、場面の中で、あいさつの使用状況を検討したもっとも全面的な教材分析が必要になる。